

A

文学作品

〇I 思潮社版・現代詩文庫

シリーズもので、戦後活躍した詩人たちに関し、一人一冊をあてて、その詩人の全貌が伝わるように編集されている。現在活躍中の詩人から物故詩人まで、すでに百人以上の詩人について出版されている。ただこのシリーズは数が膨大なので、そのなかから代表的な詩人とその作を抜粋したアンソロジーとして、『戦後名詩選 現代詩文庫特集版』二巻がある(二〇〇〇年、二〇〇一年)。また、同じシリーズで『現代詩文庫版・近代詩篇』がすでに二〇数冊出ている。本書所収の「アナポーアデイ」(千石)に取り上げた『村野四郎詩集』(一九八七年)はそのなかの一冊。また、同社からシリーズ『海外詩文庫』が十数冊出版され、英米独仏の詩人たちが一人一冊あて収録されている。同じく「アナポーアデイ」で取り上げた『ウィリアムズ詩集』(原成吉訳編、二〇〇五年)は、そのなかの一冊。このシリーズはどれも、作品そのものの収録数も適切だが、巻末に詩人論や作品論が収録されているのが

大いに参考になる。(千石)

02 手塚治虫『ファウスト』(朝日文庫、一九九四年) および『ネオ・ファウスト』(朝日文庫、一九九二年)

この二冊は手塚治虫の「ファウスト三部作」を収める。ドイツ近代文学を代表する詩人ゲーテの戯曲『ファウスト』をもとに、漫画で再話した『ファウスト』、『百物語』は舞台を戦国日本に移した翻案、そして手塚治虫の遺作『ネオ・ファウスト』は、学園紛争時代だった一九七〇年前後の日本の大学教授を主人公に見立てている。悪魔が活躍し、妖怪や魔女も登場、魔術が威力を発揮するこれらの作品は、ドイツ近代文学を代表する詩人ゲーテの『ファウスト』を日本に移植した漫画だ。世界的に有名な名作をやさしく知ることができるだけでなく、日本におけるその受容と変容という異文化理解の観点からも見逃せない。加えてゲーテの原作も読んで比較してみることを勧めたい。原作の日本語訳はいくつもあるが、芥川賞作家でドイツ文学者の柴田翔が訳したゲーテ『ファウスト』上・下(講談社文芸文庫、二〇〇三年)にしたらどうだろう。もちろんゲーテの『西東詩集』も大詩人が異文化理解に取り組んだ成果として推奨したい。これは、『ゲーテ全集(2)詩集』新装普及版(潮出版社、二〇〇三年)にも生野幸吉訳で収録されている。(高橋)

03 筒井康隆『文学部唯野教授』(岩波現代文庫、二〇〇〇年)

大学で次々と発生する事件は、唯野教授周辺の大学の珍事へと徹底的にパロディー化され、抱腹絶倒、こんなに次々とスキヤングルが続いては、どんな大学だって破綻してしまう。もちろんこれは小説の中での話だから虚構の物語、つまりフィクションだが、どの珍事も、いつかどこかで実際にあったことのように思える。パロディーたるゆえんだ。唯野教授が勤務する「早治大学」という名称が滑稽なもの、現実に存在する早稲田大学と明治大学とをあわせた名前だからだ。立教大学も上智大学と一緒に「立智大学」の名前で登場する。ペンネームで密かに文学作品を発表する作家でもある唯野教授が「立智大学」で毎週こなす講義は、戦後の「印象批評」から「ポスト構造主義」まで、その解説はわかりやすく、この小説が発表された一九九〇年頃には、この作品が文芸批評理論の入門に最適とてはやされた。虚構の小説のなかで現実の文芸批評の理論が解説されるのだから、現実の文芸批評それ自体も実は虚構に過ぎないといわんばかりだ。そういえば、最近の文芸批評の理論をつきつめると、文芸批評が語る内容もすべては虚構ということになりそうだから、小説というフィクションの中のパロディーといえどもあなどれない。文芸批評と文学研究の理論を垣間見るためにも、また、大学の裏側のあることないことを楽しむためにも、必読の一冊。(高橋)

04 多和田葉子『犬婿入り』(講談社文庫、一九九八年)

著者はドイツに移り住んで、日本語とドイツ語で作家活動を続け、日々、言葉に乗って日

独という異文化の間の時空を飛びこえている。「異文化間の愛」の実践者といつてよい。詩、小説、劇作を含む多くの作品は、国際的にも高い評価を受け、日本でもドイツでも文学賞をいくつも受賞している。本書は芥川賞受賞作『犬婚入り』とドイツに留学した女子学生を描く小説『ペルソナ』の二編を収める。両作品とも一九九三年に日本の代表的文芸誌『群像』に発表された。『ペルソナ』は、東アジアを含めて世界の各地から来た多くの留学生が学ぶドイツで、異文化に暮らす日本の女子学生という文化的マイノリティの視点から、異文化接触によるさまざまな問題をとらえている。横光利一の『旅愁』から遠藤周作の『留学』をへて多和田葉子まで、留学小説の系譜をたどってみるのも興味深い。もちろん、おもしろい多和田作品も続々と発表されている。bunkamuraドゥマゴ文学賞の『球形時間』（新潮社、二〇〇二年）や谷崎潤一郎賞と伊藤整文学賞をダブル受賞した『容疑者の夜行列車』（青土社、二〇〇二年）には楽しい遊びの仕掛けがたっぷり詰まっているし、『旅をする裸の眼』（講談社、二〇〇四年）は異文化のテーマを引き継ぐ。（高橋）

05 エミリー・ブロンテ 『嵐が丘』（上・下）河島弘美訳（岩波文庫、二〇〇四年）

一八四七年にイギリスで出版された小説だが、出版当時は全く評価されず、二十世紀になってから、よく読まれるようになった。一九三九年のビリー・ワイルダー監督による映画によって、日本でもその人氣が決定的になったと言えよう。キャサリンとヒースクリフの恋愛小説。初めに二巻として出版され、その後一巻本として再出版されたので、英語版でも

全体を二部に分けてあるものと、分けずに全三十四章で構成しているものがある。岩波文庫版は二部構成になっている。(新妻)

06

シャーロット・ブロンテ『ジェーン・エア』(上・下) 大久保康雄訳(新潮文庫、一九五三年)
ブロンテ三姉妹の長女であるシャーロットのデビュー作にして代表作となった小説。孤児ジェーンが幾多の困難を乗り越えて、最終的に幸福を手にするまでの物語で、一人称による独特の語り口によってベストセラーとなった。一八四六年に出版された小説だが、その読者を引き付ける独特の魅力は現在もお衰えてはいない。その後が続く英米の作家、特に女性作家には大きな影響を与えている。ブロンテ姉妹の作品は、みずず書房から全集が出たため、シャーロットの『シャーリー』『ヴィレット』『教授』、アンの『アグネス・グレイ』『ワイルドフェル・ホールの住人』なども翻訳で読むことができるようになった。(新妻)

07

生野幸吉・檜山哲彦編『ドイツ名詩選』(岩波文庫、一九九三年)

詩は、長編叙事詩でもないかぎり、そんなに長くないから、とりあえずすぐに読み終えられる。だから、文学が苦手という人は、詩から読み始めるといい。長編小説には詩とは異なる文学の醍醐味があるが、詩は文学のさまざまな側面を凝集したジャンルだ。短い作品でも、何度も読んであれこれ考えると、少ない言葉から思いもかけなかった意味が読み取れる。詩の言葉に耳を傾けることで、詩を読むわれわれ自身が、言葉の可能性を究極まで

追求できるところが詩のおもしろさだ。ゲーテ、ハイネ、リルケをはじめ日本で親しまれて来た詩人たちはもろん、ブレヒト、ツェラン、エンツェンスベルガーなど二十世紀の代表的詩人まで、ドイツ語の詩から三十八詩人八十二編を精選、日本語訳に加えて原詩のドイツ語テキストと脚注を備えたこの詩集、ぜひ手に取ってみよう。朗読つきのCDブックス版もある。(高橋)

08

ギュスターヴ・フローベール『ボヴァリー夫人』(上・下) 伊吹武彦訳(岩波文庫、一九三九年)
エマ・ボヴァリーは何よりもまず「読書する女」だ。まだ幼い頃からロマンチックな小説を読み漁っては、恋愛や都会生活について紋切型のイメージを作り上げていく。小説に描かれた恋に憧れ、最後は破滅する小説のヒロインという構造は、この十九世紀の風俗小説にきわめて現代的な趣を与えている。いわば小説を読むことのスキャンダルを描いたこの小説が発表直後に裁判沙汰になったのも(判決は無罪)、権力側の単なる無理解によるものと片付けることはできない。おそらく文学とは根底的なところで秩序に対する侵犯であるといえるだろう。(菅谷)

09

ギュスターヴ・フローベール『紋切型辞典』小倉孝誠訳(岩波文庫、二〇〇〇年)
普通、辞典の類はなにか役に立つ知識を教えてくれ、そのようにして我々の社会生活の助けとなってくれる筈のものだ。ところが、紋切型を列挙したこの奇妙な辞典は、むしろ社

会的なコミュニケーションを攪乱することを目指している。フローベール自身がある手紙の中で述べるところによれば、「誰でも一度これを読んだなら、そこに書いてある通りのことをうっかり口にするのではないかと心配で、もはやしゃべれなくなる」というのが、この未完の辞典の隠された目的である。言葉を奪うための辞典というこの前代未聞の文学的野心が果たしてどこまで成功しているかどうか、ぜひ自分自身で読んで確かめてみてほしい。(菅谷)

IO オノレ・ド・バルザック『ペール・グリオ』鹿島茂訳(藤原書店、一九九九年)

バルザックの世界は記号論の世界だ。作中人物の人相、服装、または身振りから、家具や馬車の描写にいたるまで、そこでは詳細に書き込まれたおびただしい数の視覚的ディテールが、性格や社会的身分といった不可視の属性を意味している。この小説の舞台である「十九世紀の首都パリ」はまさに難解な記号にあふれており、地方出身の野心的な青年である主人公ラスティニヤックは、この記号読みの非情なゲームに一通り習熟した後に、高台の墓地からパリに向かって「今度は、おれとおまえの一对一の勝負だぞ」という名セリフをはく。(菅谷)

II マーク・トウエイン『ハックルベリー・フィンの冒険』(上・下)西田実訳(岩波文庫、一九七七年)

『トム・ソーヤーの冒険』の続編として書かれ一八八五年に出版された(イギリスでは

一八八四年）作家マーク・トウェインの代表作。アメリカならではの生き生きとした話し言葉で主人公ハックによって語られ、アメリカ文学における古典中の古典と目されてきた。邦訳も数多い。しかし、昨今、やむにやまれず逃亡した奴隷のジムは、少年ハックが人間的な成長を遂げるために必要な道具立てになっている、つまり、悲惨な黒人奴隷の歴史的背景が、黒人を人とも思わない人種差別主義者であるという「過ち」を、ごく当たり前のヒューマニズムによって矯正するために、いわば「だし」として用いられているのに過ぎない、という批判が盛んになされている。（後藤）

I2 F・スコット・フィッツジェラルド『グレート・ギャツビー』野崎孝訳（新潮文庫、一九七四年）

一九二五年刊、アメリカ文学を代表する恋愛小説。作家フィッツジェラルドはこの作品で「ジャズ・エイジ」といわれた一九二〇年代の寵児となる。主人公ギャツビーが、かつて身分違いの恋をした女——今は大富豪の妻となり、娘の母となったデイジー——を取り戻そうとする、あまりにも切なくあまりにも純真な努力を描く。再会を果たし、たがいの心のうちを確認するも、ふたりを取り巻くあらゆる現実は過酷で、結局、ギャツビーはデイジーの犯した罪を被って殺される。「もちろん過去は繰り返せるさ」とは作品中もつとも記憶に残る主人公のセリフ。（後藤）

I3 J・D・サリンジャー『キャッチャー・イン・ザ・ライ』村上春樹訳（白水社、二〇〇三年）

一九五一年刊、アメリカ文学を代表する青春小説。全編、当時のニューヨークの学生風スラングで綴られている。わが国では先ごろ出版された村上春樹の訳でまた話題となった。世の中は、大人は、みな「いんちき (dumb)」だ——この現実社会に受け入れられることのないナイーヴな「優しさ」をもてあます主人公ホールデン・コールフィールド。ライ麦畑で夢中に遊ぶ子供たちが誤つて崖から落ちたところを捕まえる（これが原作タイトルの意味）、そんな人になりたいと夢をいだくホールデンの落ち行く先は、西海岸の精神病院——。マスメディアへの露出を極端に嫌つた小説の名手サリンジャーの唯一の長編小説で世界的ベストセラー。（後藤）

I4 D・W・ライト編 『アメリカ現代詩101人集』 沢崎順之助・森邦夫・江田孝臣訳（思潮社、

一九九九年）

ウイリアム・カロス・ウイリアムズよりもっと今に近い現代アメリカの詩人たちの代表作を翻訳紹介したアンソロジー。詩人とその作品の選び方も、詩の理解・翻訳も優れている。ポエト・カフェと呼ばれる自作朗読パフォーマンスをライブで見せるカフェが、ニューヨークその他の大都市にあるが、その常連だった若い詩人たちの詩も収録されている。

（千石）

I5 N・H・ピアソン・金関寿夫編注『現代アメリカ詩』（英宝社、一九七六／一九九四年）

福田陸太郎・刈田元司編注『アメリカ詩選』（金星堂、一九六五／一九八三年）

亀井俊介・川本皓嗣編『アメリカ名詩選』（岩波文庫、一九九三年）

アメリカ現代詩の定番を原文で読むのに手頃な選詩集兼解説書。（千石）

B 文学作品に関する批評・研究書

I6 小嶋菜温子『かぐや姫幻想』（森話社、一九九五年）

かぐや姫の物語が持っている知的水準について問い直す書。大人でも子どもでも知らない人はいない、かぐや姫の物語ではあるが、わたくしたちが絵本や昔話で知っている話と、平安時代の初期に書かれた『竹取物語』とは筋書きこそ共通するものの、その表現や主題のあり方において、大きな隔たりがある。『竹取物語』の〈知〉の水準を読み解く本書は、三島由紀夫『豊饒の海』との関連なども視野に入れた、新しい『竹取物語』論である。（小嶋）

I7 吉本隆明『源実朝』（ちくま文庫、一九九〇年）

鎌倉幕府三代将軍源実朝の残した和歌を対象とした長編評論。古典評論は、作品に虚心に向き合って、深く深く読み解いていくという書き方をすることが多いが、この書物は全体

のおよそ半分を、実朝がその長として生きなければならなかった、当時の武家社会の現実について分析・記述することに費やしており、その上で、実朝の個性的な歌がどのような生み出されたのかを明らかにしようとしている。そのため、読み始めてもなかなか実朝の和歌が登場しなくて、面食らい、かつ退屈するかもしれないが、文学と社会の抜き差ししない関係を明らかにした秀作であることは間違いないので、ぜひ一読してみてほしい。

(加藤)

I8 木村毅『小説研究十六講』(新潮社、一九二五年)

のちに『小説研究十二講』と改題され、旧新潮文庫に収められた。今は図書館か古書で読むしかない。日本の小説は二十世紀に入る頃から欧米の小説技法の影響を受けて急速に近代化した。この本を読むと、その頃どんな技法が流入してきたかが、手に取るようにわかる。多くの作家や作家の卵たちがここで紹介された技法を実際に試みた。以後、小説の書き方はそれほど進化することもなく、ここで網羅された技法の多くは現在においても古びてはいない。(藤井)

I9 阿部昭『短編小説礼讃』(岩波新書、一九八六年)

近代日本の文学伝統を継ぐ最後の文学世代と言ってもよい内向の世代と呼ばれる作家たちのリーダー的存在である著者が、短編小説をいかに味読するかを実践した書。対象となっ

ているのは、モーパッサン・チェーホフから国木田独歩・志賀直哉・梶井基次郎・菊池寛らの作。余力のある人は、阿部昭自身の作品（岩波書店や福武書店から作品集が出ている）にも挑戦してみるといい。（藤井）

20 俵万智『短歌をよむ』（岩波新書、一九九三年）

ベストセラー歌集『サラダ記念日』で一世を風靡した歌人による短歌入門書。書名の「よむ」には、歌を享受する意の「読む」と、歌を生み出す意の「詠む」との、両方の意味が託されている。第一部「短歌を読む」では、古典短歌と近代短歌から例を引きながら、短歌の味わい方を親しみやすく解説。第二部「短歌を詠む」では、実作者としての経験を踏まえて、短歌の作り方について具体的に述べる。「歌はこう作ればいいんだよ」という教師的語り口ではなく、著者自身の詠歌に対する悩みや迷いなどにも触れながら語られているところに、類書に見られない本書の魅力がある。第三部「短歌を考える」では、主として現代短歌を取り上げながら、著者独自の短歌論をわかりやすく展開している。（加藤）

21 廣野由美子『嵐が丘の謎を解く』（創元社、二〇〇一年）

『嵐が丘』という小説は、二十世紀から詳細に研究されているが、『嵐が丘』を丹念に読んだ後で本書を読むと、気づかずにいた重要な問題がまだこれほど多くあることを知り、研究対象としての文学テクストの豊穡さを実感することができる。それと同時に、これまで

の文学研究動向や、現在の研究方法を『嵐が丘』研究という実例をとおして知ることができる。『嵐が丘』の読書から文学研究へと進もうとする場合に、必読の書と言える。(新妻)

22 デイヴィッド・ロτζジ『小説の技巧』柴田元幸・斉藤兆史訳(白水社、一九九七年)

デイヴィッド・ロτζジは、小説家であると同時に英米文学研究を専門とする大学教授でもあり、小説も研究論文もそれぞれ翻訳がある。本書は内容的には研究者としてのロτζジの仕事に含まれるが、イギリスの新聞『インデペンデント』に連載されたものももとになっており、一般の読者を対象に書かれているところが、最大の特徴となっている。五十の項目について、実例として十八世紀から二十世紀にいたる英米の代表的小説が用いられており、小説技巧の入門書であると同時に英米小説のガイドブックとして読むこともできる。

(新妻)

23 シヤルル・ボードレル『ボードレル批評』(全四巻)阿部良雄訳(ちくま学芸文庫、一九九九年)

『悪の華』と『パリの憂鬱』で名高いこの天才詩人は、また第一級的美術批評家、文芸批評家でもあった。その一連の美術評論は、ギリシア・ローマの古典的な美がまだ理想とされていた時代に、現代的であることを芸術家の倫理として主張したもので、その後の絵画の流れに強い影響を与えた。というとむしろ堅苦しい印象を受けるかもしれないが、実際にはボードレルの緻密な筆致は時にエキセントリックなまでに過激な様相を帯びる。

その強烈なアイロニーは、文学なるものに対して我々がもっている良識的なイメージを、粉々にしてしまうだろう。(菅谷)

C 文学やその周辺に関する参考書

24 聖徳太子「憲法十七条」〔小島憲之・直木孝次郎・西宮一民・蔵中進・毛利正守校注訳「日本書紀②」(小

学館、新編日本古典文学全集3、一九九六年) 五四二―五五一頁所収〕

聖徳太子が飛鳥時代に推古天皇の摂政として、冠位十二階を定め、遣隋使を派遣し、仏教を奨励するとともに「憲法十七条」を制定したことは有名だ。その「憲法十七条」が「和をもつて貴しとなし」ではじまることを知っているひとも多いだろう。しかし、「憲法十七条」全文を読んだことのあるひとは少ない。有名な冒頭の一節についても、内紛の絶えなかつた大和朝廷内の官吏の心得と説明されたり、「和」の理想が日本人の心の原点だと解く向きもある。当時の日本は朝鮮半島から多くの「渡来人」を迎え、また、遣隋使を派遣して積極的に大陸の文化を学ぼうとしていた。それは異文化との出会いが活発な時代だった。当時の日本のそうした国際的文脈を念頭に置くと、「憲法十七条」からは異文化への対応を含む新しい意味が読み取れる。「憲法十七条」を今日まで伝えてるのは『日本書紀』だから、これをひもどくのが一番だ。おすすめは、漢文の原文に、書き下し文を添え、各

頁の上段には頭注、下段には現代日本語訳を備えた校訂版。読み易いばかりか、テキスト校訂と注釈は文献学の基礎作業だから、これを機に、文献学が隆盛を極めた十九世紀後半のドイツから日本文学の研究に移植された文献学の最近の成果も覗いてみよう。(高橋)

25 大岡信『うたげと孤心 大和歌篇』(岩波書店、同時代ライブラリー、一九九〇年)

「うたげと孤心」という耳慣れない書名によって、この書物を敬遠して読まないと、大いに損をする。「うたげ」というのは、詩歌がしばしば人々の共同の場から生み出され、共同の場において享受されてきたという、日本の古典詩歌の一つの特質を言い表すために選ばれた言葉。これに対して「孤心」とは、そうした共同の場において製作・享受されていながら、結局のところ詩歌を生み出したのは作者の個人的な心なのだという、もう一つの側面を言い当てるために選ばれた言葉である。文学者の孤独な営為が作品を生み出すという図式的な捉え方を相対化するのに、きわめて有効な処方箋を与えてくれる書物である。(加藤)

26 後藤祥子編『王朝和歌を学ぶ人のために』(世界思想社、一九九七年)

書名を見ればわかるように、大学などで王朝和歌を学ぼうとする読者に向けて書かれた入門書であり参考書であるが、最新の研究成果を反映しながら新たな知見を盛り込んでもいて、その意味ですぐれた論文集にもなっている。全体は三部構成をとっていて、第一部「王

朝和歌への誘い」は、王朝和歌に関する基本的な知識をわかりやすく提示、第二部「王朝和歌を読む」では、王朝和歌の豊かで多様な世界を具体的に紹介し、第三部「和歌世界の広がり」では、物語・日記・歴史物語など、他のジャンルと和歌との関わりについても目配りをきかせている。(加藤)

27 服藤早苗『平安朝の母と子』『平安朝の女と男』(中公新書、一九九一／一九九五年)

女性史学から捉え直した、平安朝の家族観および男女観。父とは何か、母とは何か。男とは、女とは、そして子とは何か……。十世紀前後の王朝社会から始まる、〈家〉觀念の形成の歴史を辿りながら問うていく。現代における家族問題・ジェンダー問題の起源は、一〇世紀前後の宮廷貴族社会にあるということが、わかりやすくかつ歴史史料に基づいた確かな叙述によって説かれており、必読の書である。(小嶋)

28 小林秀雄『無常という事』新潮文庫『モオツァルト・無常という事』(一九六一年)などに収められている

「当麻」「無常という事」「平家物語」「徒然草」「西行」「実朝」の六篇のエッセイから成る古典評論で、一九四二年に刊行された。小林秀雄の古典への対し方は、対象とする作品の全体像を描こうとはせず、またそれまでの研究・批評をあまり顧慮することもなく、自己の関心に思い切り引き付けて読み解くというもの。こういう批評方法(印象批評)自体は、あまりにも素朴な方法で、真似することは勧められないが、そこで展開された読みは実に

あざやかに個々の作品・作者の本質を言いあてている。今読んでも全く古さを感じさせないのは、かなりすごいことである。(加藤)

29 中野三敏『十八世紀の江戸文芸』(岩波書店、一九九九年)

本書所収の「日本の物語から」(小嶋)に述べた、寓意に関する評論の歴史については、概ね本書に整理されていることがらである。上田秋成の小説観に見る寓意については、本書に先立って中村幸彦「上田秋成の物語観」『近世文芸思潮攷』(岩波書店、一九七五年)が古典的名著として知られる。いずれも専門的な書物であるが、関心があれば紐解いてもらいたい。(小嶋)

30 三好行雄『近代文学研究とは何か——三好行雄の発言』(勉誠出版、二〇〇二年)

日本の近代文学研究や小説の分析方法を確立した著者の、研究方法をめぐっての発言を集めたもの。「作家論」「作品論」「バルト」「テクスト」などをめぐる著者の見解が、編者による解題や懇切な注によって、わかりやすく辿れるようになっていく。著者には別に『三好行雄著作集』全七巻もあり、本書だけで飽き足りない読者はぜひともこれに挑戦されることをおすすめする。(藤井)

31 柄谷行人『近代日本文学の起源』（講談社文芸文庫、一九八八年）

近代文学の〈知〉の枠組みの起源について、近代主義的な見方への懐疑に立ちつつ問いかける洞察の書。十世紀も前の王朝物語を、今わたくしたちが読み味わい、また何がしかの知的な刺激を得ることができるのは、近代と前近代とが、曲がりなりにも地続きであることとの現れにはかならない。風俗や制度上の隔たりこそあれ、社会の一隅に生息する個々人の心性や哲学において何ほどの径庭があるのか、じっくり考える必要がある。 (小嶋)

32 宇野邦一『物語と非一知』（書肆山田、一九九三年）

物語の〈知〉を微分化する方向で論じるのではなく、〈知〉なるものの曖昧さの近傍を回遊する魅惑的な論著。フランスの文芸理論を自家薬籠中のものとしつつ、著者の物語に対する深い愛と理解が示される。蓮実重彦の物語批判とは対照的な思考が提示されており、比較しつつ読むと面白い。(小嶋)

33 波多野完治『文章心理学入門』（新潮文庫ほか、一九五三年）

昭和の初めに文章心理学なるものを確立した著者の考えと方法とをわかりやすく説いた入門書。文章とか文学は、とかく評価が主観的になりがちだが、著者は悪文と名文の違いを、数量的方法と心理学理論とによって説明しようとする。文体研究の入門書としても活用で

きるほか、随所にいろんな作家の文章が引用されているので、近代文学史の入門書としても活用できる。(藤井)

34 筒井清忠『日本型「教養」の運命——歴史社会学的考察』(岩波書店、一九九五年)

これからの文学研究にとって、歴史学や社会学ないしはそれらの周辺領域との相互乗り入れは不可欠であり、そうしたものにも幅広く目配りする必要がある。本書は日本の歴史社会学の創始者とも言える著者による、近代日本文化論の名著。引用資料のタイプや論の展開の仕方も文学研究者のそれとは一味違い、そんな点までもが刺激と参考になる。(藤井)

35 A・トクヴィル『アメリカの民主政治』(上・中・下) 井伊玄太郎訳(講談社学術文庫、一九八七年)

国際社会の中で粘り強くコンセンサスを得ることを放棄し、圧倒的な力の誇示によって世界中を服従させようとしているかのようなブッシュ大統領の姿勢を見慣れている我々にはぴんと来ないかもしれないが、アメリカは十九世紀において(そしてある意味では今もって)民主主義の最先端を走っていた。このことはおそらく現在のアメリカの迷走ぶりを理解する上でも決定的に重要であろう。それは単なる民主主義への背信というよりは、民主主義の内部にはらまれている本質的矛盾が顕在化してきたものだといえるかもしれない。いずれにせよ、トクヴィルのこの古典的名著は、我々が今生きている世界について考えるためにも必読である。(菅谷)

36 亀井俊介『アメリカ文学史講義』（全三巻）（南雲堂、一九九七／一九九八年、二〇〇〇年）

アンチ・アカデミズムを標榜する著者が東京大学教養学部で行った講義「アメリカ文学史」より採録。堅苦しい事実列挙型の文学史を脱し、とつとつとした滋味あふれるような語り口をそのまま再現した。アメリカ文学史を楽しく通覧するには最適の書。しかし、実のところ、この三巻の本がいったいどれほどの（ほとんど嫌味なほどの）該博な知識、つまりは正当なるアカデミズムに支えられてできているか、それがわかるようになるのはこの本に誘われてアメリカ文学の道を相当奥深くまで進んでしまったときだろうか。（後藤）

37 本田創造『アメリカ黒人の歴史 新版』（岩波新書、一九九一年）

独立前のアメリカの土地にはじめてアフリカ人が上陸したときから、合衆国を南北に二分し、ついには戦争にまで発展した奴隷制度の時代を経て、二十世紀の中葉の公民権運動収束にいたるまで、アメリカ黒人たちの歴史をひもといた一冊。アメリカ白人社会への隷属から自立への足跡ばかりでなく、黒人間にあった自決権のあり方をめぐる攻防も読みどころ——アメリカ黒人文化の背景について知りたい人には、格好の入門書である。（後藤）